

『時代を着る—ファッション研究誌  
『DRESSTUDY』アンソロジー』



©The Kyoto Costume Institute

判型：A5判 328頁

監修：深井晃子

編集：石関亮

発行：京都服飾文化研究財団 2008年

目次

第一章 着るものと脱ぐもの

対談 20世紀の身体

鷲田清一、小池一子

スキン・コンシャスネス

谷川渥

フェティシズムとアイデンティティ——皮膚の政治的生活について

港千尋

コラム 着るものと脱ぐもの

高階秀爾

モダニティの身体

ヴァレリー・スティール

時代のアティテュードとしてのマネキン

オリヴィエ・サイヤール

アートとファッションの身体

岡部あおみ

コラム 脱皮する・腐り残る

船曳建夫

未来の身体、ファッションとパフォーマンスの狭間に

マリナ・アブラモビッチ

インタビュー 触って見る

荒木経惟

第二章 拡散するまなざし

手仕事の歴史的意味

今村仁司

コラム 異文化を活かす知恵

木村尚三郎

博覧会とジャポニスム

吉見俊哉

明治初期の輸出室内着——椎野正兵衛店を中心として

周防珠実

コラム 東方趣味と日本——浅井忠のこと

杉本秀太郎

ペーパー・ドレス——1960年代における素材開発と

ファッションの連動についての一考察

新居理絵

対談 未来派と政治——イタリアン・モードの背景

田之倉稔、小池一子

### 第三章 文学の装置としての服飾

未必のアヴァンチュール——『天守物語』あるいは泉鏡花と

出来事としての色彩

伊東乾

漱石作品の服飾描写——『我輩は猫である』の登場人物について

小池三枝

プルーストとニジンスキー

吉川一義

モード、あるいは時を印す装置——オデットのアルモワール

深井晃子

### 第四章 見られる男性 (Homme Objet)

ジェンダー研究の変遷と男性学の可能性

上野千鶴子

着ることと男性

伊藤俊治

フランスのダンディズム

北山晴一

黒の男たち

山田登世子

対談 変容するファッション写真

飯沢耕太郎、深井晃子

ファッションナブル・マン——近・現代における男性の

ファッション観の変遷

石関亮

江戸の男色とファッション

佐伯順子

エロスと性

鹿島茂

### 第五章 衣服の枠を超えて

カチーナ、あるいはマージナルなものの特異性

今福龍太

ダリと1930年代の「モード」

巖谷國士

コラム ハンド・バッグ——生活を演じる小道具

多木浩二

避難所としての衣服——アートによる社会問題への挑戦

ルーシー・オルタ

原始の官能から無重力の戯れまで——イッセイ・ミヤケ試論

小林康夫

インタビュー 衣服の枠を超えて

フセイン・チャラヤン

「アウラの消滅」以後——「引用」を越える現代アートのたくらみ

塚原史

あとがき

深井晃子